SEA TRIAL

PROUD OF FINLAND

SARGO 31 EXPLORER

フィンランドボートの雄「SARGO(サルゴ)」を産み出す「SARINS BOATS」、
プロフェッショナルユースのワークボートを造り上げてきたビルダーだからこそできる質実剛健なエディション。
「冒険者(エクスプローラー)」の名を冠された「SARGO 31 Explorer」を、大阪湾西宮沖で試した。

text: Atsushi Nomura photo: Makoto Yamada
special thanks: OKAZAKI YACHTS http://okazaki.yachts.co.jp

31フィートというサイズを感じさせない、より小型のボートを走らせているかのような錯覚に陥る高い操作性
それでいて重厚なまでの走行フィールと、高い居住性に、北欧フィンランドのプライドを感じる

近年日本でも、北欧・バルト海エリアのパワーボートが人気だ。どことなくクラシカルな風貌の、フロントウィンドウが立ち上がったデザインのトローラーテイストのボートを良く見かける。たとえば休日に東京湾を流していても、出会うのは1隻や2隻ではない。中でもフィンランドの雄「SARGO（サルゴ）」の躍進は著しく、毎年コンスタントに輸入されており、最も目にする機会が多いように思う。

「SARINS BOATS」(Sarins Båtar Oy Ab) については、これまでにも何度か取り上げてきたが簡単におさらいしておこう。SARINS BOATS はフィンランドの名門ヨットビルダー「SWAN」の船大工だった創業者の Edy Sarin が、1967年にバルト海最北ボスニア湾に面する Kokkola という街で立ち上げた。以来 Sarin 家が代々経営している。元々フィンランド国内向けにカスタムボートやワークボートを、プレジャーユースのプロダクション艇では「MINOR（ミノア）」を造り続けてきた。20世紀末葉からは「MINOR」を国外へ積極的に展開し、ドイツをはじめ欧州各国で大ヒット、日本でもお馴染のフィンランドボートの代名詞となった。2014年には「MINOR」を「SARGO」というブランドネームに改め、さらに積極的な海外展開を推し進めている。

現在の「SARGO」はインボード仕様を廃し、すべてインアウト仕様。レンジは25～36フィート。今回試乗したのは31フィートモデルの「Explorer（エクスプローラー）」エディションだ。その特徴は「冒険者（エクスプローラー）」を彷彿させる質実剛健な風貌と渋めのカラーリング、インテリアもエクステリアに合わせたイメージで造られている。フィンランドボートの中でも「SARGO」はモダンで明るいイメージのあるブランドだが、そこに荒々しさと力強さを加味したシリーズが「Explorer」である。

*

新西宮ヨットハーバーの桟橋に舫われた「SARGO 31 Explorer」。光の角度によってはモスグリーンやブルーグレーにも見えるチャコールグレー（Antracite Grey）のハル。それだけでは軍用艇かワークボートのようにも見えてしまうが、ウォーターラインやブルワークトップのホワイトが映えて非常にスタイリッシュ。プレジャーボートのテイストを残しつつ、ハードユースを想像させる実に精な印象だ。

レイアウトはセンターキャビンのウォークアラウンドタイプ。バウデッにかけて多少の傾斜はあるが、段差がないため揺れる海上でもスムーに行き来が可能だ。また全周をめぐるレールはマブラックの極太（φ35mm）仕様で、身体をホールした時の安心感は抜群。しかもデッキ面からの高さがるため安全面でも優れている。

トランサムゲートも同じ太さのマットブラックで揃られている。デッキは全面フレキシチーク（Flexiteek）でトラディショな雰囲気にぴったり。アフトコックピットの右舷側にはアフトステーシも備わる。アフトコックピットの下部がエンジンルームとなり、今回の試

シート・ソファ類はアルカンターラで仕上げられた贅沢なもの。非常に美しく、肌触りの良い質感も落ち着きを与えてくれる。全開できるハードトップは走行時には爽快な風を送り込む。シートおよびテーブルアレンジの豊富さも「SARGO」に代表されるフィンランドボートの魅力だ。

艇はVOLVO PENTA D6-370 DPを1基搭載。しかも2基掛け可能なスペースのため非常に広い。なおエンジンバリエーションはシングルであれば基本D6(330～400馬力)、ツインの場合はD4(225 or 300馬力)×2基となる。

インテリアも、エクステリアに合わせてアレンジされている。たとえば室内の木部は、スタンダード仕様の「SARGO 31」ではチークが用いられているが、「Explorer」の場合はウォールナットが採用されている。アルカンターラを用いたシート・ソファ類も落ち着いた色合い。バウキャビン、アンダーキャビンの2ベッドルームは、どちらも明るく非常に快適だ。センターキャビンは両サイドにドアが設けられ、ルーフのハードトップは手動で開閉。さらにキャビン後部のウィンドウは跳ね上げ式で全開できる。全開にすればまるでオープンボートのようなさわやかさ、高緯度帯の短い夏を思いきり堪能するためのアイディアは「SARGO」に共通するフィロソフィといえる。

*

西宮沖はほとんど風もなくフラットな海面。シングルエンジンらしい高い操作性で、31フィートというサイズを感じさせず、より小型のボートを走らせているかのような錯覚に陥る。それでいて重厚なまでの走行フィール。トラディショナルなスタイルながら、フィンランドボートの例に漏れず、非常に素晴らしい走行性能を見せる。シェイクダウン直後だったため、あまり長時間のテストは行わなかったが、今回のシートライアルではマックス33ノットを叩き出した。実際、クルージングスピードでも25ノット程度は出るため、速度性能としては十分すぎるだろう。メーカー発表値では370馬力仕様で33～35ktとなっており、ほぼスペック通りの性能を発揮した。ちなみにツインの300馬力の場合、マックス40～42ノットとされ、パフォーマンスの高さも「SARGO」ならではだ。

*

スタンダードモデルの「SARGO 31」の明るく華やかな雰囲気とは、一味も二味も違う「Explorer」エディション。ヘビーデューティーなプロフェッショナルユースを想像させる容姿は、マリーナでも一際目を引く。そしてその見かけを裏切らない素晴らしいパフォーマンス。ヨーロッパで高い人気を誇る「SARGO Explorer」の実力を垣間見た。 **P.B.**

バウキャビンとアンダーキャビンは、明るめのファブリックが特徴的。31フィート艇としては十分すぎるほどの広さが確保され、居住性も高い。シャワールーム兼用の個室ヘッドはバウキャビンの脇に設けられている。

素晴らしい走行フィールを見せる「SARGO 31 Explorer」。VOLVO PENTA D6-370 DPを搭載した広々としたエンジンルームは日常的なメンテナンス性も高い。シングルなら330～400馬力、ツインの場合は225馬力か300馬×2基、エンジンチョイスが豊富なことも魅力だ。

高さのある35mm径のレールに囲われたデッキは走行中も居心地の良いスペース。アフトステーションも備わり使い勝手が良い。フリーボードが高いため、桟橋との行き来は大型スイミングプラットフォームからが楽だ。

SARGO 31 Explorer

全長　9.96 m
全幅　3.30 m
喫水　1.05 m
重量　5.10 ton
エンジン　VOLVO PENTA D6-370 DP
最高出力　370 HP
燃料タンク　500 L
清水タンク　120 L
問い合わせ先　オカザキヨット
TEL: 西宮 0798-32-0202　横浜 045-770-0502
http://okazaki.yachts.co.jp